

あいち県

一般社団法人 愛知県環境測定分析協会



2026/4/20

会報 第167号



第7回 写真コンテスト 四季部門：丹川 幸久 氏（一般財団法人 東海技術センター）

「海岸の桜み～つけた！」

【写真の趣旨説明】

5月に内海海岸で散歩中、サクラ貝を見つけました。

目次

災害時相互応援協定締結団体による意見交換会	2	令和7年度 景況調査結果報告	5
委員会活動報告	3	私の趣味	7
令和7年度環境計量士等研修会受講報告	4	喚起標語 入選作品紹介	8
令和7年度SOP研修会受講報告	5	事務局からのお知らせ	8

四季折々

春といえば何を思い浮かべますか。

私は毎年、たけのこの旬が来るのを楽しみにしています。実家の近くの山でたけのこ堀りをするのが春の恒例行事となっています。足の裏の感触に集中して、土のわずかな膨らみを感じ取ります。そして、土から顔を出すか出さないかという絶妙なタイミングのたけのこを探し出し、身を傷つけないように慎重にたけのこを掘り上げます。

たけのこ（筍）は漢字で「竹かんむりに旬」と書きますが、1旬（＝10日）で芽が出てから竹になることに由来しているそうです。それほど早いスピードで成長するため、収穫する絶妙なタイミングを探す難しさも、収穫の面白さのひとつかもしれません。

自分の手で掘り上げたばかりのたけのこを、アク抜きをして、食卓に並べます。定番の煮物や、天ぷら、炊き込みご飯に。柔らかさや甘みなど、この時期ならではの味わいに「春が来たなあ」と実感が湧きます。

最近は企業努力のおかげで、多くの食材を一年中手に入れられるようになりました。その反面、次の季節を心待ちにするわくわく感や、限られた時期にしか味わえない「旬」の尊さを、感じにくくなっているかもしれません。だからこそ、たけのこの味わいや短い期間だけ咲く桜のような、この時期にしか出会えない自然から春の訪れを感じるこの感情を大切にしていきたいです。

文責：渡部 すみれ

「災害時相互応援協定 意見交換会」

参加報告

災害緊急時対応委員会 委員長 林 昌史

2025年6月20日、大阪府大阪市において「2025年度 災害時相互応援協定 意見交換会」が開催されました。

災害時相互応援協定は、愛環協をはじめ、福島県、埼玉県、神奈川県、横浜市、大阪府、堺市、東京都、千葉県の県単協議会（計9団体）の間で締結されているものです。災害などの非常時において、締結団体がそれぞれ有する自治体との災害協定における環境調査・分析業務を円滑に実施できるようにすることを目的としています。本意見交換会は、2019年の協定締結以降、締結団体が持ち回りで開催しており、自治体との協定の現状や課題の共有を通じて、各県単協議会の活動の円滑化に寄与してまいりました。今回は、自治体との災害協定締結を進めている県単協議会もオブザーバーとして参加し、11団体33名での開催となりました（表1）。

表1 意見交換会の参加団体一覧

・一般社団法人 愛知県環境測定分析協会（愛環協）
・大阪環境測定分析事業者協会（大環協）
・一般社団法人 神奈川県環境計量協議会（神環協）
・一般社団法人 埼玉県環境計量協議会（埼環協）
・堺市環境計量協議会（堺環協）
・千葉県環境計量協会（千環協）
・東京都環境計量協議会（東環協）
・一般社団法人 福島県環境測定・放射能計測協会（福環協）
・横浜市環境技術協議会（横環協）
※広島県環境計量証明事業協会（広環協）
※一般社団法人 福岡県環境計量証明事業協会（福環協）

※はオブザーバー参加を表す。協定締結団体：あいうえお順

愛環協からは、林会長と筆者の2名が参加いたしました。以下に、意見交換会の概要をご報告いたします。

（1）災害対応に関する講演

はじめに、福環協会長で防災士でもある田邊様より、「大規模災害に備える理想のBCPとは？一長期にわたる支援も想定した持続可能な仕組みの構築を」と題したご講演をいただきました。近年激甚化する自然災害への備えについて、実体験を交えながら分かりやすくご説明いただきました。

東日本大震災では、地盤沈下や港湾・道路機能の停止、燃料不足など想定外の事態が相次ぎ、広域災害においては自社のBCPだけでは十分に対応できない現実が明らかになりました。また、復旧に長期間を要する場合もあることから、資機材や燃料の備蓄、初動体制の整備の重要性、さらには県域を越えた相互支援の仕組みづくりや、過度な負担を生じさせない運用上の工夫についてもご紹介いただきました。BCPは作成して終わりではなく、継続的な

見直しが重要です。日頃からの食料備蓄や簡易トイレの準備、避難時の安全対策など、身近な備えの積み重ねがいざという時の力になることを、改めて学ぶ機会となりました。

（2）相互応援協定の実効性向上に向けた意見交換

続いて、各団体の代表者から、それぞれの取り組み状況や課題について発表がありました。その後、災害時の相互応援協定を「実際に機能する協定」へと高めていくための現状認識と今後の方向性について議論が行われました。

事前アンケートによると、連絡体制や仕組みづくりの検討は進められている一方で、各団体と自治体との協議が十分に尽くされないまま計画が先行しているのではないかと懸念も示されました。まずは各団体が会員および自治体と十分に協議を行い、契約形態、費用負担、指揮命令系統などの基本事項を整理することが不可欠であるとの認識で、おおむね一致しました。

本協定は、2017年の防災の日に埼環協と神環協が締結したことを契機に始まりました。自治体との災害協定を補完し、被災団体を他県団体が支えることを目的としていますが、法人格の有無による契約方式の違いや、自治体との協定における運用方針の相違など、実務面での課題も多くあります。今後は、これらの課題に関する各団体の進捗状況を共有できる窓口やマトリクス表を整備し、情報共有を一層進めていくことが提案されました。あわせて、各団体内部での周知徹底や部会設置による検討の深化、自治体との継続的な対話を通じて、本協定の原点に立ち返った着実な体制構築を図る必要があるとの認識を共有いたしました。



写真1 意見交換会の様子

（3）おわりに

本意見交換会は、災害時の相互協力体制を強化するため大変有意義な機会となりました。今後は、今回得られた知見を各団体がそれぞれの地域での具体的な取り組みに活かすとともに、広域災害にも対応できる実効性のある連携体制を構築していくことの重要性を確認いたしました。

意見交換会終了後には親睦会を開催し、和やかな雰囲気の中で交流を深めることができました。また、翌日には2025年日本国際博覧会（大阪万博）を訪れた参加者もあり、意見交換会は終始有意義なものとなりました。

委員会活動報告

◇総務委員会

令和8年度「環境に関する喚起標語」の募集に際し、皆様から多数の作品をご応募いただき、心から感謝を申し上げます。全131点の応募作品の中から厳正なる選考のうえ、特選作品及び入選作品を選びました。本誌にて選考作品を発表しています。なお、特選作品は6月に行われる定時社員総会で表彰し、ポスターとして配布いたしますので、各事業所内でご活用ください。また、令和7年度景況調査の結果については今号及びHPで紹介させていただきます。

総務委員長 大場 恵史

◇企画・広報委員会

令和7年度第4回目の委員会を2月6日に対面開催で行いました。本会報誌167号の記事・編集スケジュールについて確定し編集作業を進め発刊終了しました。

講演講師の選定については各委員から提案された演題のうち2題を選考しました。6月9日（火）開催の定時社員総会記念講演会は、アライツ社労士事務所の浅野様より「今後の改正に向けて今からできる実務対応」、6月29日（月）開催の環境月間講演会では、岐阜大学准教授森部先生による「クマとの付き合い方」を予定しております。会員の皆様には多数のご参加をお願い致します。

また、会報誌の冊子体廃止及びHPの更新頻度変更について検討を行いましたが現時点では結論が出ていない為、今後の課題とします。

企画・広報委員長 石井 良孝

◇教育研修委員会

1月30日、N i t e r r a 日本特殊陶業市民会館にて21名が参加しSOP研修会を開催しました。(株)ユニケミー池田寛氏からSOPの重要性と作成方法の講義を受けた後、7つのグループに分かれ演習を行いました。活発な議論によりSOPの要点を理解するとともに、昨年度に引き続き昼食会と名刺交換会をプログラムに取り入れ参加者同士がより活発に交流できた有意義な研修会となりました。

令和7年度に開催した研修会は年間を通じて愛知県及び中部地方だけでなく全国各地から大変多くの方にご参

加いただきました。誠にありがとうございました。

令和8年度は6月11日、12日に環境測定分析新任者研修会（オンライン）、7月24日に精度管理研修会①【基礎統計コース】（オンライン）を予定しています。多数の参加をお待ちしております。

令和8年度も研修会の充実を図り、多くの方に参加いただけるように努め、会員の皆様のレベルアップのお役に立ちたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

教育研修委員長 牛古 誠

◇技術委員会

令和7年度第3回技術委員会を令和8年2月13日に開催し、今期事業の振り返りと来期事業の企画検討を行いました。

☆水質・土壌ワーキンググループ

令和7年7月に実施した共同実験「模擬排水中の全窒素・亜硝酸性窒素の分析」について、令和7年12月に結果検討会を開催しました。参加機関間で分析結果の比較や測定上の留意点について意見交換を行い、共同実験の成果を共有しました。

なお、来年度についても7月頃に共同実験の実施を予定しており、実施項目については模擬排水中の銅及び全クロムを進めています。

☆大気・臭気ワーキンググループ

令和8年1月に臭気測定に関する勉強会を開催しました。臭気測定の基礎や測定手法、実務上の留意点などについて理解を深める機会となりました。

来年度は、11月頃に共同実験の実施を予定しており、具体的な実施内容について今後検討していく予定です。

☆騒音・振動ワーキンググループ

令和8年4月17日（金）の13時からN i t e r r a 日本特殊陶業市民会館で勉強会を開催しました。開催が遅れており申し訳ありません。今回の題目は「低周波音」です。リオン株式会社様を講師に迎え、低周波音の測定方法を中心に、低周波音の基礎知識からその対策等についてもお話ししていただきます。低周波音に馴染みのない方にも理解しやすい内容となっていますので、専門分野に関わらず多くの皆様のご参加をお待ちしております。

技術委員長 伊藤 諭志

◇災害緊急時対応委員会

令和7年度は、同時調査訓練をはじめとする災害緊急時対応委員会の活動に多くの会員の皆様のご協力をいただき、誠にありがとうございました。

令和8年度は災害協力認定会員名簿の更新年度ではございませんが、年度替わりにあたり、担当者や連絡先等に変更がございましたら、事務局よりお送りしております「緊急連絡先変更届」にてお手続きをお願いいたします。

本年度は、例年実施しております同時調査訓練などの活動に加え、9月に他県単と締結している災害時相互支援協定に関する意見交換会を愛環協主催で開催する予定です。

本年度も、委員会活動へのご理解とご協力を賜りますようお願い、どうぞよろしくお願い申し上げます。

災害緊急時対応委員長 林 昌史

令和7年度環境計量士等研修会受講報告

一般財団法人東海技術センター

渡部 すみれ

令和7年11月13日にオンラインで開催された「令和7年度環境計量士等研修会」を受講しました。環境分野は社会情勢や規制の動向によって常に変化していると感じています。日頃、分析業務行う中で、分析依頼の背景にある社会動向を捉えられるような情報収集をしたいと思い、本研修への参加を決めました。

第一講義は、愛知県環境局 環境対策部 水大気環境課 大気規制グループ 川島祥子氏から「解体等工事の石綿飛散防止対策に係る大気汚染防止法の規制」についてお話しいただきました。アスベスト含有建材を使用した民間建築物の解体棟数は増加傾向にあり、そのピークは令和10年頃と推測されています。これに伴い法規制の整備が進んでおり、令和2年の大気汚染防止法の一部改正事項について詳しく説明いただきました。解体作業者の健康保護や建物外への漏えい防止を目的に、作業方法が細かく指定されていることを知り、規制強化の背景を理解することができました。

第二講義は、国立研究開発法人産業技術総合研究所 ネイチャーポジティブ技術実装研究センター 自然資本 DB構築・価値解析研究チーム 土田恭平氏から「土壌中のナノプラスチック濃度測定に向けて現状と課題」についてお話しいただきました。ナノプラスチックの生態系および人体への影響を中心にお話しいただきました。その影響評価のために、紫外線可視分光光度計を用いた土壌中のマイク

ロプラスチック濃度の測定方法が開発されており、実際の水田での調査結果についても解説をしていただきました。特に、被覆肥料によるプラスチックの環境残留が問題視されています。課題解決のために、まず現状を把握するための「測定」が不可欠であり、環境分析の意義を再確認しました。

第三講義は、国立研究開発法人国立環境研究所 環境リスク・健康領域 環境リスク科学研究推進室 大野浩一氏から「環境基準等の設定に関する資料集」についてお話しいただきました。環境基準は、人の健康保護や生活環境の保全といった観点から設定されており、リスク評価は情報収集、暴露解析、有害性評価を基本の流れとして行われます。ここでいうリスクとは「望ましくない出来事が発生する可能性」と定義され、そのリスクが受け入れ可能なレベルであるかという観点で有害評価がなされます。特に印象的だったのは、リスクとは安全か危険かの二分法ではなく、白から黒の間のグレイゾーンのどこにあるかという許容範囲での考え方です。また、リスクの捉え方は時代の社会の価値観にも大きく影響を受けるという点も、分析値を扱う上で新たな知見となりました。

第四講義は、ジーエルサイエンス株式会社 高原玲華氏から「PFAS分析、前処理のためのポイントと注意点」についてお話しいただきました。水試料や土壌試料中のPFAS分析において、近年燃焼後イオンクロマトグラフィーが多く試験されていることが挙げられました。また、PFAS分析で行われる固相抽出におけるイオン交換固相と逆相固相それぞれに特徴的な注意点があることが説明されました。高濃度の塩化物イオン等の共存物質により保持力が弱まる可能性が指摘されました。ブランク対策についても、フッ素樹脂加工器具の使用を控えることや、サンプルを樹脂部に接触させない工夫、さらには作業環境全体の汚染管理の重要性について具体的に学ぶことができました。

環境分野とは範囲が非常に広いですが、今回の研修会では官公庁やメーカー、研究機関という異なる立場からの知見を伺うことができ、多角的な視点を得る貴重な機会となりました。今後も、環境分野の動向について注視し、業務に活かせるようにしたいです。

令和7年度SOP研修会受講報告

一般社団法人愛知県薬剤師会

永井 健太郎

令和8年1月30日に開催されたSOP研修会に参加いたしました。本研修では、SOPの意味や作成方法などを学びました。また、実際にグループでのSOP作成演習を行い、より理解が深まり有意義なものとなりました。

午前中は、SOPについての講義を受け、SOPの定義や作成する目的、作成手順について学びました。SOPは分析者による精度の差を無くすためにも作成されているため、より具体的にポイントを押さえて作成する必要があります。例えば、JISや告示などでは、分析するにあたっての最低限の情報のみ記載されていることが多く、使用する器具や機器などの細かな指定がされていません。そのため、分析者によって使用する器具や機器が異なり、精度に差が出てしまう可能性があります。SOPにはそれらについても記載し、誰が分析を行っても同じ手順で、精度に差がない結果を出せるようにすることが大切であると学びました。

午後からは、各班3人の7班に分かれ、浮遊物質（SS）のSOPを分析初心者の方が使用する設定で、JISと環境庁告示59号を参考に作成及び発表を行いました。それぞれの班において司会進行、発表者、作成者の役割に分かれて作成演習に臨みました。作成したSOPは、プロジェクターを用いて班ごとに発表を行い、受講者や講師の方々から、質問や講評をいただきました。私たちの班では、JISや告示に記載されている、曖昧な数値などをより具体的に記載することを目指してSOPを作成しました。例えばSSのろ過器の口径については、それぞれの会社で使用している物を参考に、具体的な口径を記載しましたが、他の班の発表を聞き、私たちの班のSOPには、まだ曖昧なところがあることに気が付けました。分析操作をよりリアルにイメージしながら作成することで、さらに具体的に作成することができたのかなと感じました。また、班ごとに着眼点が異なり、7班それぞれの色のSOPを見ることができ、とても勉強になりました。

私は普段から分析業務に従事しており、日常からSOPを見て分析を行っています。後輩への教育においてもSOPを使用して教える機会が多くありました。今回の研修会に参加させていただき、改めてSOPの重要性を理解することができ、この研修で学んだことを活かしてSOP作成に努めていきたいと思えます。また、SOPは一度作成したら完成ではなく、法令が改正されたときはもちろんですが、それ以外にも気づきやコツなどを随時盛り込んで更新

し、より精度の高い分析を行えるように進化させていくことが重要であると感じました。最後に、今まで同業他社の方とグループワークを行う機会は多くはありませんでした。貴重な場に参加させていただけたことに心から感謝いたします。

令和7年度 景況調査結果報告

総務委員長 大場 恵史

令和7年度の景況調査結果についてご報告いたします。ご協力いただきありがとうございます。調査対象は正会員63社で、有効回答は49件（回収率77.8%）でした。

集計方法は、「好転」した率から「悪化」した率を差し引くDI値方式を採用しています。DI値は令和4年度の4.3をピークに2年連続で前年比マイナスが続いていましたが、令和7年度は2.0と景況は持ち直しつつある兆しも見られます。

表1 令和7年度 DI値

好転		20.4%（10社）
変化なし		61.2%（30社）
悪化		18.4%（9社）
DI値	令和7年度	2.0
	令和6年度	-6.7
	令和5年度	0.0
	令和4年度	4.3
	令和3年度	-20.0
	令和2年度	-18.6
	令和1年度	-16.3

備考）DI値は景気動向指数

「好転」と回答した会員は10社で、その要因（回答数の合計は24件）として最も多かったのは「受注価格の上昇」7件（29.2%）で、昨年度の3件（21.4%）から大きく増加しました。次いで「受注数量の増加」7件（29.2%）、「取引先の増加」4件（16.7%）といった直接的な要因が多く挙げられています。また、間接的な要因として、「新規分野の拡張」3件（12.5%）、「業務の効率化」2件（8.3%）が昨年度（いずれも1件）より増加しており、全体を通して会員各社の多角的な経営努力がうかがえる結果となりました。

一方、「悪化」と回答した会員は9社で、その要因（回答数計14件）は「受注数量の減少」9件（64.3%）が例年どおり過半を占めています。

【令和8年度の見通し】

令和8年度の見通しは、「良くなる」が7社（14.3%）、「変わらない」が32社（65.3%）、「悪くなる」が10社（20.4%）であり、全体としてやや厳しい見通しが示されています。

【価格転嫁】

人件費・材料費の高騰を受けて、価格転嫁を既に「実施中」と回答した会員は32社（65.3%）、「予定あり」は11社（22.4%）でした。「実施中」が過半数を占め、「予定あり」を含めると87.8%に達しており、多くの会員が価格改定に踏み切る、あるいは検討している状況がうかがえます。価格改定幅は「5～10%」が過半を占めており、現時点では大幅な価格転嫁までには至っていない状況です。

表2 価格改定幅

5%未満	23.3%（10社）
5～10%	58.1%（25社）
10～15%	16.3%（7社）
15%以上	2.3%（1社）
計	43社

【現在の経営課題について】

現在直面している経営課題について最大4つまで挙げていただきました。表3のとおり、「技術者教育」は今回も63.3%の会員（49社のうち31社）が経営課題として回答しており、業界の長年の経営課題であることが改めて示されました。人材育成に関わるこの課題については、協会の研修事業においても引き続き共有し、支援してまいります。

経営課題全体の傾向は例年と大きく変わりませんが、「従業員の採用・確保」、「経費の増加」、「設備・機器等の更新」、「人件費の増加」が上位を占めています。これらの結果から、人材の採用・教育に関する課題と、増加する経費負担が会員各社にとって大きな経営上の懸念となっていることがうかがえます。

会員の皆様のご参考になれば幸いです。

表3 現在の経営課題

経営課題		回答	
1	従業員の採用・確保 (3)	33件	18.1%
2	技術者教育 (1)	31件	17.0%
3	経費の増加 (1)	27件	14.8%
4	設備・機器等の更新 (4)	26件	14.3%
5	人件費の増加 (5)	22件	12.1%
6	デジタル化の推進 (8)	15件	8.2%
7	需要の停滞 (7)	12件	6.6%
8	働き方改革 (6)	7件	3.8%
9	法令順守 (10)	4件	2.2%
10	ハラスメントの対策と予防 (11)	3件	1.6%
11	取引条件の悪化 (9)	1件	0.5%
12	その他 (12)	1件	0.5%
合計		182件	100.0%

備考）括弧内は昨年度調査時の順位



「私の趣味」

株式会社愛研
石井 良孝

堤防釣りとは家庭菜園

一つの趣味は釣りです。釣りが趣味という方は多くいると思いますが、御多分にもれず私もその一人です。

晴れていても、曇の日も波の音を聞きながら餌をつけた竿を海水に投入します。何が釣れるのかわくわくしながら釣り糸を垂らしている時間は至福のひとつです。

私のお気に入りの釣りスポットは、知多半島の師崎周辺と日間賀島です。季節や場所によって、仕掛けや餌を変え挑むのですが、ほとんどが小さい魚です。稀に大きな魚、タコやワタリガニが掛かった時の手ごたえはたまりません。もちろん何もつれない日もありますが、無心になり、非日常を味わい気分転換になっております。

直近の出来事といえば、久しぶりに竿先が大きくしなり網を用いて釣り上げてみると、なんと40cmは超えるであろうフグでした。大物を釣り上げた時の嬉しさは格別です。

釣りに夢中になっておりますと、お弁当をトンビやカラスに奪われ、また買いに行く羽目になることがあります。食べ物の入っている袋を見分けほんの数秒目を離した隙にお弁当を持っていく、ただただ感心するばかりです。



何年も釣りをしていると、釣れる魚も年々変わってきていることに気づきます。以前はメバル、カワハギやグレなどが良く釣れましたが、数年前からほとんど釣れなくなりました。それと引き換えにタカノハダイやキタマクラ、更にはウミヘビなど暖かい海域に生息する魚が釣れるようになりました。これは海水温の変化でしょうか。

また、水中ごみや釣り場のごみも問題になっています。釣り人ばかりではないですが、環境に配慮した行動が大切だということを実感しております。



もう一つの趣味として我が家の猫の額ほどの土地で家庭菜園を行っています。

春はスナップエンドウ、グリーンピース、ブロッコリー、イチゴ、夏にはトマト、なす、ピーマン、きゅうり、大葉、オクラ、秋は畑を休ませ冬は正月菜を毎年育てております。

ナメクジ用の駆除剤を土壌に混ぜ、猫除けを設置し、人体に影響のない殺虫剤を撒き丹精込めて育てています。駆除剤の効果が弱くなると、ナメクジが野菜の苗を食べてしまうため梅雨時期は必死に退治しています。

野菜ごとに水の量や肥料の種類を変え試行錯誤を重ね、今年もおいしい野菜が育つよう家庭菜園に励みたいと思います。



令和8年度 環境に関する喚起標語 入選作品・入選者紹介

<作品テーマ:環境技術の価値向上>

区 分	標 語	会社名	氏 名
特選	信頼築いて価値を生む 価格に映す測定技術	サンエイ(株)	近藤 好
入選	信頼を生む技術には、信頼に見合う価値がある	(株)ユニケミー	柿家 睦美
入選	健やかな未来をつなぐ環境技術 価値向上でつむぐ信頼	(株)環境公害センター	掛野 紋
入選	環境測定技術で築く 価値ある未来 次世代への確かな 架け橋に	(株)テクノ中部	岸名 亜紀子
入選	みんなで創る未来の品質 高めるほどに 価値高まる	(株)イズミテック	酒井 美智子
入選	確かな分析正しい評価 価値でつなぐ未来の環境	東レコムズ名古屋(株)	高須 啓史
入選	測定技術は信頼の源、確かな対価で築く未来	(株)環境科学研究所	林 研一郎
入選	価格転嫁は未来への投資 明日の社会を支える確かな計量	(一社)愛知県薬剤師会	藤山 法士
入選	適切な価格転嫁は 適切な分析技術の再評価	(株)東海分析化学研究所	増田 享子
入選	正しい計量 確かな技術 高める価値が 守る未来	(株)愛研	向野 高明
入選	環境守る技術のコスト 正しく評価し 繋げよ未来に	(一財)東海技術センター	山本 敦恵

氏名(敬称略)の五十音順



事務局からのお知らせ

【定時社員総会】

令和8年6月9日(火)
サイプレスガーデンホテル

【環境測定分析新任者研修会】

令和8年6月11日(木)～12日(金)
オンライン開催

【環境月間講演会】

令和8年6月29日(月)
Nitterra日本特殊陶業市民会館

【精度管理研修会①(基礎統計コース)】

令和8年7月24日(金)
オンライン開催



編集後記(長瀬 勝)

今年の名古屋の桜の開花予想は3月17日頃と平年より早く、満開は3月28日になる見込みです。本会報誌「あいかんきょう」167号が皆様のお手元に届く頃には、桜も散り始めているかもしれません。

私事ではございますが、毎年花見に出かけるのを楽しみにしております(昼間からお酒を飲めるので、という理由もあります)

また、新年度のスタートに伴い新入社員の入社や部署異動などで新しい仲間を迎えられていることと思います。

最後に、この会報誌は会員の皆様から寄稿いただいた原稿によって成り立っています。これからもより魅力ある会報誌づくりに努めてまいりますので、引き続きご支援とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

発行人 (一社)愛知県環境測定分析協会
会長 林 辰哉

〒460-0022
名古屋市中区金山1-2-4
アイディエリア405号
TEL: 052-321-3803
FAX: 052-684-4238
E-mail: aikankyo@nifty.com

編集 (一社)愛知県環境測定分析協会 企画・広報委員会

委員長 : 石井 良孝
副委員長: 柳下 武己
委員 : 中野 雅則、日野 栄一、佐藤 勇人、
渡部 すみれ、松本 貴郁、山本 浩明、
長瀬 勝